

自分史にみる歴史の捉え方~~歴史を自からつくり楽しむ

1. はじめに

市民の「歴史との触れ合い」としては、名所旧跡観光、歴史ドラマ鑑賞、歴史小説読書、等があり、これらを通して市民は歴史を自らの世界に取り込み、歴史の作る側と受け止め側の両方にて人間と社会のおりなす物語を楽しんでいる。また、「歴史の触れ合い」のそもそもについては、市民側への歴史の定着には感性的情緒的であることから、市民の接する歴史は市民感覚に基づく歴史であるともいえる。

今回は、「歴史を作るのも自分、堪能も自分」となる個人の歴史を念頭に市民感覚世界をつまびらかにすることを目標に、歴史の扱われ方となる「歴史への市民感覚とは」や「市民感覚による歴史の捉え方とは」を論考するとした。具体的には、1975年頃からブームとなったいわゆる自分史を題材に、自分世界を如何にして感覚的(市民感覚)に捉えているかを検討する。ただし本稿では、用語「歴史」を厳密に規定せずに使った(体系であったり、時系列にとどめたり)。また本稿をエッセイ風の論評とした。

2. 人生のとりまとめとその形態

人生とりまとめを自らの活動の自身への投影と捉え、その様相を以下に述べる。

(1)各人にとって；学生にとっては就活用。社会人にとっては人生の振り返るための記念もの。専門家には(自分史でなく)自身の活動集・行政集や人生集といった集大成もの。要は、誰にとっても自分の生きてきた証や活動成果などを取りまとめれば、これは立派な自分世界の体系集となる。例を挙げる；

スピリットの範疇；自叙伝、人生論集、エッセイ集、(日記も)、等

創作活動等の範疇；論文・一般の著作、創作作品、業務・活動実績のまとめ集等がある。これらは、人生の節目に取りまとめられ、人生の貴重な宝となる。

(2)社会人にとって；人生の転機毎に自分の過去の行動を履歴書として取りまとめている。これも自分世界を凝縮した歴史ものであり、専門家のまとめ集とは違って、履歴書の項目に歴史が凝縮されている。

(3)学生にとって；学生が就職活動する際に自分自身を見つめ直し、就職先企業への自己PR度向上を目的に、一枚の履歴書ではなく自分世界を満載したものを自分史としてつくることが多い。自分史の定義うんぬんよりも(専門家ではないという意味で)市民感覚的に自分世界をまとめている。なお社会人でも学生のノリで自分史を自分のためにつくることも多い。

3. 問題の根源には

自分史を作るための要件としての理屈を述べる。

(1)市民感覚：いわゆる歴史の展望には「社会、(地域)、自分」の枠組みがあり、自分の中にも「社会性、自分(個性)」の枠組がある。こうした枠組みの下で個人

感覚が社会感覚になり（逆に社会から個人へのフィードバックもあり）社会性のもとに市民感覚が形成されると考えている。この観点のもとに自分世界を時系列に体系化することによりつくられる自分史が自分にとっての基本歴史となる。

(2) 自分史における社会性；例えば就職氷河期で就活が困難を極めたとかいうように、自分史制作において社会情勢が大きく関与した構成になることが多い。これは社会の歴史が自分史にリンクしたことを意味し、社会の歴史を自分史から展望したことにもなり、さらには社会性や個性の重なりで自分史の根幹が形成されたことになる。

(3) なぜ自分史か；歴史については、（歴史本来の学術分野は別にして）社会において歪曲化された歴史認識の問題や、地域における伝説・伝承の創作的改ざんの史実化の問題、さらに捏造や贋作の問題、等がある。これらの問題では、事実の正面や背後における人間がどう対処しているかがポイントとなる。具体例の一つとして、たまたま著者は某所での伝説・伝承が史実に化けてしまったことを目の当たりにした時、「なぜそうなるのか、携わった方々は何を求めていたのか、研究者は何をしているのか」気になったことがある。そこでは、（捏造は割愛して）創作の源なる想いがどう培われていくのか、たとえ自分史制作にも面白さ追求として創作的解釈の介在がどうあるのか、創作者側の思いあるとみている。だからこそ、歴史と人間という枠組みで人間側にシフトした展望が必要であり、人間としてまず自分を対象とした歴史を遠望したくなるのはそんな理由である。

4. 自分史づくり

自分史にて社会性の積極的関連をどう図るのか、述べる。自分の存在を確認したくなるのは社会性の行為そのものであり、その一環で自分と他者や社会の関連づけを恣意的意図の有無にかかわらず自分史に盛り込むことになる。

では、そうした認識の自己確認はどうしているのであろうか。自分史づくりにおいて、自身の歴史を解釈・評価しプレゼンするという行為がまさにそれであり、自身が手掛けることにより自分史が履歴書の延長や個性的思考を凝らしたデザイン作品そのものと位置付けることができ、歴史はそうした所にさりげなく入り込むといえる。以下に詳述する。

(1) 歴史の捉え方；自分世界は、人、時間、場所、事、モノ等の構成要素とそれらを思考や行動を軸に関連付ける要素とからなり、関連づけそのものが歴史と捉える関連付けには、時系列的関連、因果としての関連、環境や社会との関連、さらには（種々の事象を塊にした）ブロック的関連等がある。実際にはブロックやフロー表現には慣れが必要であるので、多くの場合はマトリクス構成となる。すなわち、縦グシを時系列に、横グシを価値観、信条・心情、感性、社会観等に、時には斜グシを思考行動にした二次元構成が一般的である。なお、関連は学歴、職歴、ボランティア歴等の履歴と一般的に捉えられている。

(2)表現方法;文で綴るのが一般的。年表やマトリクス表に解説文や写真を挿入。この他には絵画や造形物もある。人生について、山や道、木立や草花、人体や曼荼羅等になぞらえて絵画や造形物の表現もある。

(3)構成意図;構成は「感情と理屈とでストーリー展開しプレゼン」。これがやりがいと楽しみにつながり、人生の検証・評価を介して人生向上や使命観醸成へと進展する。楽しみの創生には、プレゼン中のハードタッチ、面白い感情拡大、ミステリアス、不確実、フィクション、まがい等が多種多様にかかわっている。

5. 自分史の活用

自分史(づくり)の効用には、歴史の市民感覚の形成や各種能力の向上といったことの包括として精神的支柱の構成がある。これにより、自分史の活用が自分ならびに他者や社会に対して活力を伴って多様的に可能となる。以下、詳論する。

- ・自分史をもとに、自分自身、仲間、一般人、企業、社会、等とのコミュニケーションが図られ、楽しめる。特に仲間とは、互いに自分世界をバックに語り合う楽しさ、相互尊重、自信や触発、深い会話(人生論等)が可能となる。なお、ごく普通の日常においても会話は人生史を背負ったものとなることもある。

- ・能力・素養の向上;生き方の哲学的思考、博識・見識・良識の育みがあり、さらには思考と観察(俯瞰と深堀)、分析と総合、想像力の実践素養が磨かれる。

- ・社会性には;人生そのものや個々の活動が社会と人間の系の再認識につながり、自分存在がより確たるものとなる。

- ・歴史には;過去と現在さらには「現在から未来へ」の時間軸で各事象を関連づけ(繋げ)、「歴史を刻む→社会的役割→自分証明」が実感される。

- ・歴史の効用;歴史の中の自分が主たることを実感。これより、自分の集大成を通して、想像力・物語力・全体俯瞰の磨きにより、自ら触発され、時代認識、歴史認識が磨かれる。なお、個人が参加の社会歴史については割愛。

6. おわりに

本稿では、自分史における歴史性・社会性に着目し、自分史がなぜ歴史なる関係性を持って楽しく構成できるかを論考した。以下に論考核心部を列挙する;

(1)自分史は自分世界の歴史を主観的・客観的に評価しプレゼンした総体であり、他者や社会に向けての自分発信を通して己の存在感が実感される証でもある。

(2)こうした一連の行為が社会における貴重なページを個人から刻むことになる。

(3)またその行為が社会歴史における市民感覚の磨きにもつながる。

△以上をもって、自分史における歴史について、歴史の範疇を意識することなく歴史のつくり上げ・評価し自分のものに行っていることが明らかとなった。なお著者は過去に実施の社会人向け自分史講座を基にプレゼン例を割愛し執筆とした。

付録 自分史の構成例、主なもの列挙

0. 概要

内容；生きてきた記録→自分世界(時間、空間、事間、人間)→集大成(業績、思考、他)

記録に基礎おく展開； 縦軸・横軸、俯瞰・深堀、集大成

方法；時間軸展開、俯瞰と深堀の(高さ軸)展開

1. 時間軸中心の構成

(1) 履歴の一般表示 (時間軸を明確にした表現)

・ 通常の履歴書 ・ 年表

(2) 行列表現 時間軸と事軸、記事の簡潔掲載

横欄：時間軸；小中高大、幼・少・青・成・壮・老、学校期・社会人期に特化、他

縦欄：事軸；所属、人間関係、目標、業績、思考、価値観、夢、他

| | 幼年期 | 少年期 | 青年期 | 壮年期 | 円熟期 | 評、エピソード |
|------------|-----|-----|-----|-----|-----|---------|
| 年齢 | | | | | | |
| 所属;学校、企業、他 | | | | | | |
| 人間関係;交友 | | | | | | |
| 業績 | | | | | | |
| 趣味 | | | | | | |
| 目標・夢 | | | | | | |
| 特記 | | | | | | |
| | | | | | | |

(3) 項目別表

特定の所属期にて

姿勢(思考や流儀)、評価記事、

トピックス、エピソード、他

2. 関連付け中心の構成、デザイン

時間の流れをフローで表現(ブロックフローチャート)。

木立として各事象を枝ぶりで表現。

連峰として各事象を個々の山に。

単独峰では各事象を麓から頂上に

3. 集大成としての構成

著述；作品集 業務；業務履歴集

ビジュアル；写真集 他

謝辞：写真は朝活@富山の永吉隼人氏撮影。

記して謝意を表します。

あとがき；歴史が歴史の専門家や愛好家のみならず一般市民にも身近な存在になるにはどうすべきか、ここ数年考えている。今回は市民の個人レベルでの歴史の関わり方に着目した。



写真 自分史講座会場風景



写真 自分史制作中